

北山ハケ岳通信

—美術館—

「枯野」「雪国」—田村一男画伯 市へ寄贈—



寄贈された「雪国」M80号

文化功労者、日本芸術院会員、光風会理事長であ

られた田村画伯は、茅野市の自然を大変愛しておられました。そのため、蓼科や霧ヶ峰を描かれた作品が多く残されています。

画伯は今年の7月10日に92歳で逝去されました。生前からの茅野市へのご厚情から今回の作品寄贈が実現したものです。11月5日の贈呈式では、長女の中村由起子様から矢崎市長に直接贈られ、ご披露されました。

日展や光風会展等で、「田村画風」と言われる程に日本でも貴重な存在でした。

寄贈された2点の作品は、茅野市美術館に展示し、広く市民に公開します。ぜひ観覧して下さい。

展示——11月25日～後期常設展

子どもに引かれて美術館まいり —輝く子どもの感性—

信濃美術館移動展の三日目、夕暮れ近くになった頃のことです。子どもさんに手を引かれるようにして一人の母親が訪れました。子どもはまるで解説者でもあるかのように、あっちの絵、こっちの絵と何か話しかけながら見て回っています。

入る時、「ぼく、二度目だよ」と喜々として語っていました。聞いてみると、学校引率で見に来たとき大変良かったのでお母さんに話し、「お母さんも是非みておきな！」とついに引っぱり出してきたとの事でした。

初日に宮川小学校の一年生が先生に引率されてきましたが、その中の一人だったのです。

子どもたちは、学芸員のお話を食い入るように聞いていました。作品を指さす毎に「アーッ」とか「ウワーッ」と歓声をあげているのには驚きました。

小学校一年生に絵がわかるか、どこまで理解できるか等と心配もしていたが全く無駄であったようです。むしろ、小さい子どもたちの直観的な感性の鋭さにはうたれました。良いものは良い、好きなものは好きと実に明確です。全く純粋そのものの姿で作品に対じしていました。

「ウワーッ、スゴイナア」という声の中には、色彩のコントラストの美しさや画面から訴える迫力、柔ら

かさ、強さ、優しさ等々を見事に感じとっているのをうかがうことができます。すばらしい感性です。



信濃美術館移動展 解説を聞く子どもたち

美しいものに対する感じ方は、子どもだから大人だからという区別は無いように思います。純粹性という点から見ればむしろ子どもの方が直観的に深いものを感じ取っているかもしれません。

お母さんを引っぱり出したこの子も立派ですが、引っぱり出されたお母さんも立派です。こんな親子関係ならば家庭の中にもきっと温かく美しいものが溢れているだろうと嬉しくなります。

縄文口マンを体験する

尖石考古館では、今年も様々な催しが行われました。

特別展「尖石遺跡展—最近の試掘調査の成果から—」

特別展には平成2年から行っている試掘調査で出土した多くの遺物を常設展示室の一部を使って展示しました。また、平成7年に尖石遺跡と与助尾根遺跡の間にある谷で行った自然科学を中心とした成果についても講義室で展示しました。

特別展は4月26日から6月1日までの約1カ月間開催しました。期間中にゴールデンウィークがあったこともあって、5,000名を超える入館者がありました。

第4回尖石縄文文化大学講座

特別展期間中の5月3日には明治大学学長の戸沢充則先生を招いて、尖石縄文文化大学講座を開催しました。尖石縄文文化大学講座は南大塩にあった旧考古館の頃、3回開催されましたが、それ以後開催されていませんでした。青少年自然の森の研修棟で開催しましたが、132名の参加がありました。

第1回尖石縄文ゼミナールの開催

特別展開催中の5月25日、自然科学分析の中から花粉分析を担当した信州大学農学部講師の中堀謙二先生に研究発表をしていただきました。青少年自然の森の会議室には60名以上の聴衆がつめかけ、満員となりました。



第1回縄文ゼミナール

第18回縄文土器製作教室

毎年開催している縄文土器製作教室も今年で18回目となりました。講師は初回から指導をお願いしている遠藤昭男先生です。今年は19名の参加がありました。

夏期縄文土器製作教室（8月9・10日）

尖石友の会が主催する夏期縄文土器製作教室は、夏休み期間中ということもあって、遠方から参加する人々もたくさんいます。今年も13名の参加がありました。野焼きは9月14日に行いました。

小・中学生縄文教室（8月8日・9日）

夏休み期間中を利用して、小・中学生を対象とした縄文教室を開催しました。縄文土器を作ったり、黒曜石の石器を作ったり、発掘している遺跡の見学をして楽しい縄文体験をしました。

第2回尖石縄文ゼミナール

前長野県立歴史館専門主事の宮下健司先生と、昨年相沢忠洋賞を授賞した茅野市在住の武居幸重先生を招き、「縄文ピーナスの魅力を探る」のテーマで研究発表と討論を行いました。青少年自然の森会議室で行われたこの催しには90名もの聴衆がつめかけ、参加者から活発な意見がだされ、盛り上りました。

速報展「縄文時代の初めと終わりの新資料から」

9月14日～10月5日まで、考古館の講義室を使って開催しました。茅野市宮川所在の大悦遺跡・大悦南遺跡の発掘調査の資料を写真や図などのパネルと併せて展示しました。

尖石縄文祭り（10月10・11日）

縄文を楽しく体験してもらおうと、土器の野焼きや石器・土鈴・土笛作り、火起こしや縄文の模様付け、縄文食の試食などの催しを行いました。

初めての試みにもかかわらず、2日間で700名を超える参加者がありました。

また、この時野焼きをした縄文土器・小・中学生縄文教室で書いた絵や市民の縄文をテーマにした絵画などの作品を、10月いっぱい考古館の講義室に展示しました。



土鈴・土笛作り

*新尖石考古館の建設に伴う業務についてのおしらせ

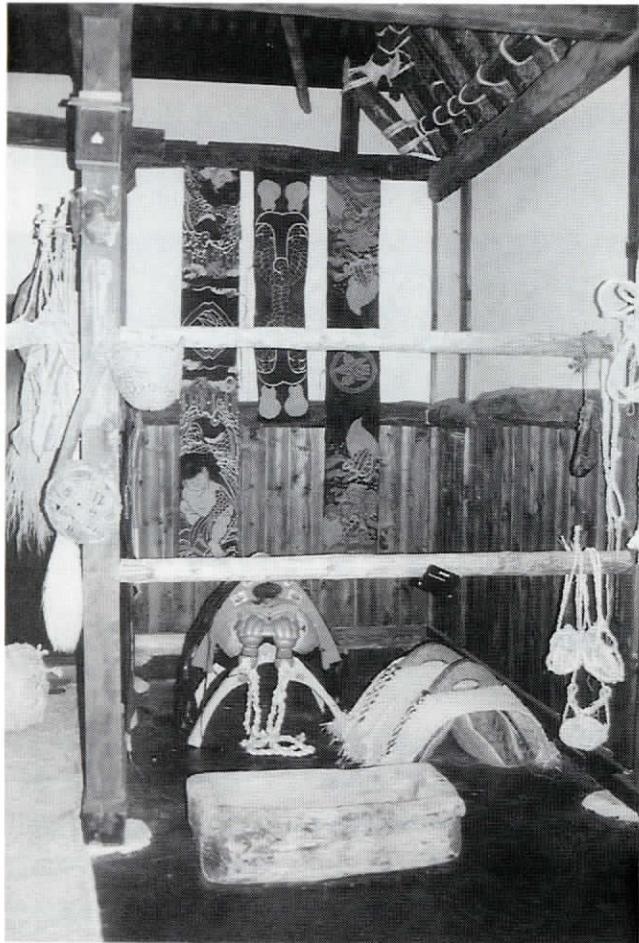
平成10年6月から、新考古館が開館する12年4月までの間、考古館の業務は、青少年自然の森管理棟で行います（TEL.0266-76-2270）。

この間、資料の貸し出しは原則として中止します。なお国宝『土偶』をはじめ主要展示品は、八ヶ岳総合博物館（TEL.0266-73-0300）にて展示する予定です。

平成9年度民俗展「駒の郷～愛馬とともに」開催

平成10年1月4日(日)～2月1日(日)

博物館の2階の展示室には、古い民家の復元家屋があります。広い土間の一部分には、馬小屋があり、家族の一員として馬を大切にしていた事がうかがえ、農家と馬との密接な関係を表しています。



博物館常設展示室の復元家屋にある廐

左の柱に、鳥の巣箱のようなもののかかっています。これは、廐の守り神の祠で、中には「猿」の頭骨が入っています。

馬と猿の組合せは、民芸品や、鞍の飾りなどにも見ることができます。



馬に乗った猿の民芸品

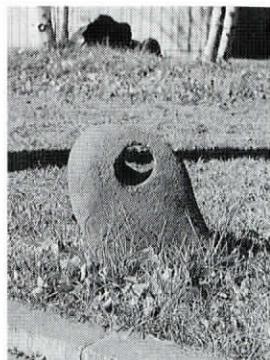
また、この地方には、昔「山鹿牧」という牧場がありました。豊平南大塩のあたり一帯がそうだったのだろうともいわれていますが、ここから朝廷に馬を献上したといわれています。

金沢宿には「伝馬」がありました。幕府の役人などが旅をするときに荷物を運ぶ人足や馬が、いつも用意されていました。

市内の随所に見られるたくさんの「馬頭観音」は、死んでしまった大切な馬を供養する意味と、今いる馬の息災を祈って祀られているものです。

街道や馬屋の前に置かれた「駒つなぎ石」は、馬をつないで昼食を食べたり休憩したときのものでした。

生活のいたる所で人々とともに生きてきた馬たち、



駒つなぎ石

用途に併せて工夫された馬具、縁起をかついだり、馬への思いやりを表した馬具、そして身近な家畜であったがゆえに全国各地にある馬の民芸品の数々、これらを集め、年明け1月4日(日)から「駒の郷～愛馬とともに」を開催しますので、ぜひご来館下さい。

「諏訪の自然七不思議」の観察と調査

1. 縞枯山のシラビソが縞状に立枯れている縞枯現象。
 2. 車山・ゼブラ山に自然にできた階段状の地形。
 3. 水面よりも上に盛り上がっている八島湿原。
 4. 夏にも底に氷りがある茶臼山の風穴。
 5. 底石が亀甲状に配列している北横岳の亀甲池。
 6. 諏訪湖の御神渡り。
 7. 諏訪湖の間欠泉。
 8. 諏訪湖の湖面に見える水平虹。
 9. 諏訪湖の湖底に沈む曾根遺跡。
 10. 車山草原の樹叢。
- この10の不思議な現象を総称して「諏訪の自然七不思議」と呼んでいます。

今年は博物館ボランティアや市民の方々にお手伝いいただき、なぜこういった不思議な現象がおこるのか、縞枯山や車山、亀甲池の調査を行いました。まだまだ継続して調査をしなければ簡単には「不思議」の謎はとけませんが、来年も皆さんにご協力いただいてふるさと講座として観察や調査を続けていきたいと思います。

平成9年度の注目の発掘成果から

今年度県営圃場整備事業等に伴う発掘調査が、市内の各所において行われています。この内で最も注目すべき聖石遺跡の概要について紹介します。

聖石遺跡の概要

聖石遺跡は茅野市北山芹ヶ沢地区に位置します。昭和43年の開田工事で遺跡の大半は消滅したと言われましたが、今年5月からの本調査によると工事で失われた部分は全体の2割程度のようです。また、その時に作られた水田の西側は東側を削った土で盛土されているため、縄文時代中期・後期の生活面がかなり良好な状態で保存されていることも明らかになりました。

これまでに確認した遺跡の面積は約17,000m²です。しかし遺跡は、南側に位置するベッタ沢へ向いダラダラと続いており、遺跡の広がりは不明です。5月から現在の約3,000m²にわたる調査から、人々が聖石遺跡をどのように利用してきたかが、わかつてきました。

人々が聖石の尾根を利用し始めたのは、今から約13年です。

000年位前の旧石器時代から、縄文時代に入ると、まず狩猟用の陥れ穴がつくられ、中期後半になると竪穴住居址とたくさんの穴などが、尾根の平坦面を中心に作られるようになります。現在のところ聖石遺跡が大きな集落となるのは縄文時代中期後半からです。

後期の前半頃、尾根の南斜面を切り盛りして平にする造成を行いながら、その部分にベッタ沢・渋川から集めた石を持ち込んでいます。これらの石を使い住居や配石と呼ばれる石のまとまりを作っています。広い範囲に大量の石を持ち込んだ遺跡の発見は市内で初めてで、造成を伴う例は県内ではほとんど知られていないようです。



一守矢史料館

企画展『守矢文書に見る諏訪地方の災害』

神長官守矢史料館では企画展『守矢文書に見る諏訪地方の災害』展を8月5日から10月12日まで開催していました。「災害の記録」と「除災への願い」の二つのテーマで室町時代から明治時代までの古文書9点を展示しました。

「災害の記録」では、寛正5年(1464)4月5日の『守矢満実書留』に下桑原(諏訪市)で大地が動くほど鳴り、上伊那宮所竜ヶ崎城西の切岸へ光が落ち、光が落ちた辺りに血のようなものが出ていたという怪異現象の記述があります。この現象の原因として地震か隕石の落下が考えられます。阪神淡路大震災の時には磁場が歪んで発光したことが報告されているため、竜ヶ崎城西の切岸へ落ちた光は地震に伴う光である可能性もあります。

また、同じ史料の文明14年(1482)大雨により大町・十日市場・安国寺(宮川)・栗林(ちの)の作毛田畠や人牛馬家籠が押し流されました。当時神長(諏訪上社の神官)であった守矢満実はこの災害がおきた原因が合戦により御柱祭を行う日程を延期し、これに対し

て神が荒立てたからだと考えていました。

慶應元年(1865)の『年中日記』と慶應4年の『歳中日記』、明治31年(1898)の『明治三十一年記事』では、詳細に洪水の記録を記しています。特に明治31年は「横押の大水」といわれ、諏訪から山梨までの広い範囲にわたる大規模な洪水・災害に見舞われました。茅野市域もすべての河川が氾濫し、所々で堤防が決壊し、家屋や田畠を押し流しました。この時の状況を当時の守矢實久が絵図と共に詳細に書き記しています。

「除災への願い」では天保15年(1849)4月28日の『諸事日記』に伊那郡かつら島(上伊那郡中川村)から水害除けの祈禱願いがあった記述があります。昔は、災害は悪霊などによって起こると考えられており、人々は神に祈禱することによってこれらを除こうと考えていました。かつら島の祈禱の依頼に対して、諏訪神社は祈禱を行い、お札や鎌などを送っていたことがわかります。この時に送った鎌の絵が描かれており、風を鎮めるといわれている「薙鎌」とは異なる形の鎌であったことがわかります。

茅野市の博物館・文化財課だより 八ヶ岳通信 No. 16 発行年月日 平成9年12月16日

編集・発行 茅野市美術館 〒391	茅野市玉川1500番地 TEL.(0266) 73-5440
茅野市尖石考古館 〒391-02	茅野市豊平4734-132 TEL.(0266) 76-2270
茅野市八ヶ岳総合博物館 〒391-02	茅野市豊平6983番地 TEL.(0266) 73-0300
文化財課 〒391	茅野市塚原2丁目6番1号 TEL.(0266) 72-2101
茅野市神長官守矢史料館 〒391	茅野市宮川1389番地の1 TEL.(0266) 73-7567